様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ７ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４３０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１２８７５

研究課題名（和文）日本手話の源流を探るための離島手話学術調査

研究課題名（英文）A research for the origin of Japanese Sign Langugae in an isolated island

研究代表者
神田　和幸（Kanda, Kazuyuki）

京都工芸繊維大学・その他部局等・研究員

研究者番号：７０１３２１２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：聾者の言語である手話は学校教育が始まる以前から存在した。手話の歴史は聾者の歴史と同じ長さである。現在から手話の源流を探るには未就学聾者の手話を採集し研究するしかないが、離島や僻地などに人知れず居住し高齢化により絶滅に近い状態にある。未就学聾者の手話は数手話、色名手話、親族名称がないなどの特徴があり、指さしが多いのが特徴的である。一方、生活に密着した語彙は現代の手話よりも描写力があることがわかった。個人方言性が強いが共通性もみられる。

研究成果の概要（英文）：The sign language of the deaf people existed before the school education began. The length and history of the sign language and the deaf people should be the same. A research for an old or an original signs must be done to those uneducated deaf people who usually live in an isolated istand or in an rural area without being less known. Their signs have no numeral sign, no color signs nor no kinship signs, instead pointing take the roles. Their signs used in daily life are more pictorial and appealing than the standard signs. They are quite idiosyncratic but still common in part.

研究分野：手話学

キーワード：手話　源流　歴史言語学　未就学聾者

１．研究開始当初の背景

(1)全日本ろうあ連盟の公式見解では日本手話の成立は 1878 年の京都盲唖院設立だとしている（安藤・高田 1979 他）が、これは日本の聾運動としての見方であり、国際的には聾社会が組織化していなくても 聾児が生まれた家庭で自然に手話が発生するというのが定説であり(Frischberg,1987 他)、これをホー ムサインと呼ぶ。聾学校制度が確立した後も、経済的事情や地理的事情から聾学校に通わなかった聾者もいて、通称未就学聾者と呼ぶが、彼らはホームサインの使用者である。しかしホーム
サインは聾団体からも手話通訳者団体からも、原始的な身振りとされ、少数社会における内部差別の対象とされてきた。その原因はアメリカ社会の言語分類は民族主義的であり、聾社会は民族とは異なるため、特殊な言語習得過程を経るというご都合主義的論説がそのまま日本に持ち込まれた結果である。このため「手話は聾者の言語である」という主張と「手話は学校で伝承される」という主張が矛盾したまま敷衍されてしまった。聾者の存在は学校教育以前にも確認されているのだから、この 2 説は同時に併存できない。

(2)しかし標準手話を学んだ手話通訳者にはホームサインは理解できず、聾団体からも未就学聾者は「手話がわからない人」「身振り」として排除処理されてきた。本研究では手話の進化過程はホームサインからスクールサイン、コミュニティサイン、そして国内共通サイ ンへと変化していく（神田 2012）という仮説に基づき、絶滅危機状態にあるホームサインを収集することで、この仮説を実証しようとした。コミュニティサインは手話方言という形ですでに出版物も多くだされている。スクールサインについては、日本最古の手話辞典（神田・大杉 2010）からほぼ復刻できている。 ホームサインについては、奄美大島の手話調査結果(神田 1987 未発表)があるが、聾団体が手話と認めてこなかったこともあり、実態が曖昧になっている。

(3)未就学聾者は離島に孤立的に残存していることが言われてきたが、新潟県佐渡地区に多数生存していることが 2012 年の佐渡訪問の際、偶然わかった。未就学聾者は一定の年代（現在 80 代以上）に偏在しているため、高齢化により絶滅の可能性が高い。 しかしながら社会的偏見により、表に出てくることはなく、家族が隠蔽している場合も多い。日本の離島の手話については本研究者以外にはほとんど前例がなく、約 30 年前の奄美地区の調査結果もプライ バシー保護のため、公表できなかった経験がある。本研究では、一定数の調査対象の存在が一部確認済みで、本人を特定されない程度には保護できるため、生活実態や言語生活実態を報告でき、世界的にも 希有な調査であるといえる。孤島における手話調査は（Wittmann 1991,Grose 1985）があるが、いずれも画像がなく被験者が現在は生存していない。そのため追調査ができない歴史的資料でしかない。

(4)本研究者は新潟地区での研究実績があり、協力体制ができている。二次的な効果として、孤立している 佐渡地区の高齢聾者を新潟市内のグループホームに収容するという福祉的支援も並行するので、調査対象者にとっても利点があり、収容できれば、追調査の可能性を残している。

２．研究の目的

(1)佐渡市に在住する未就学聾者の手話の実態情報を調査し、日本の手話の源流を探ると同時に人権的見地から、彼らが限界集落から脱却できる生活訓練のための手段を講ずる。

(2)未就学聾者の現地実態調査は、高齢化した教育を受けていない聾者は限界集落に居住することが多いため、情報もなく途絶された状態にあるので、急ぎ実態調査し、救出の必要がある。 しかし、長い孤立生活のため、社会適応が不十分で、施設に収容し生活訓練をすることで標準的な手話を理解するようになり、介護を受けることも可能になるが、それまでのコミュニケーション確保が容易ではないため、彼らの手話をまず研究する必要がある。

(3)彼らはホームサインを使用し、未就学聾者の手話は通訳者も実態がわからないため、これを収録し、データ化する。データ収集段階で生活指導を含めた調査を手話通訳者や標準手話のできる聾者の協力を得る。

(4)録画データにより日本手話の源流としての言語分析 日本手話と比較し、言語分析を行い、歴史的変化を探る。

３．研究の方法

現地調査を主体とし、データを記述してデータベース化する。研究過程は次の４段階を想定した。

(1)交通の不便な離島での調査であり、プライバシー保護と生活保護の面も並行するため、時間をかける。
(2)合同研究会の実施（新潟市内）し、研究者グループと協力者グループによる調査方法を検討する。
(3)佐渡調査会を実施する。現地手話サークル、手話通訳者および聾家庭の協力体制を確立する。
(4)研究者と協力者の検討により調査対象者の手話形を確定し、記述。その後動画像によるデータベース化し、ホームサインと他の手話資料との比較検討作業をする。

４．研究成果

(1)新潟市内合同研究会により、佐渡地区には約 20 名の未就学聾者の存在情報が得られたが、ほとんどが高齢でかつ限界集落にいるケースが多く、近所づきあいもないため、接触が困難であった。その中で、地元の聾者集会にたまに参加する聾者 2 名について接触ができ、うち１名は家族と同居していて、家族は手話ができるため、情報が得やすいことがわかり、反対する家族を説得し了解を得て、面談と２回の録画に成功した。家族からは記録に残るなら、という了解を得た。残る一人については、孤独生活のため接触に制限があり、本研究期間内での記録はできなかった。調査過程で、新潟県妙高地区にも家族と同居し、家族に手話者がいるという条件の未就学聾者の存在が確認できたが、研究期間と予算の関係で断念した。高齢でもあり、絶滅は迫っており、継続研究申請が認められなかったことは慚愧に堪えない。

(2)現地録画に成功した聾者の手話を分析した結果、標準手話では基本とされる指文字、数字手話、色名語などのいわゆる基本語彙がないことが分かった。これらの語彙は学校や手話サークルなどの社会活動の結果習得したもので、源流である家庭手話では使用されず、指差しや空書などで代用される。これが聾団体において「手話は学校で伝承される」と考えられてきた原因の１つであることが分かった。一方で仕事に関係する語彙は標準手話にはないほど精密で描写的な手話を独自に開発しており、個人方言として成立していることもわかった。残念ながらこの聾者は２回目の録画後、すぐに昇天された。

(3)手話の変遷モデルについてはヒューマンインタフェース学会研究会、未就学聾者手話の実態については京都工芸繊維大学ＣＯＩヘルスサイエンスシンポジウム及び京都工芸繊維大学拡張コミュニティエイド研究センター秋季セミナー、手話源流と手話歴史言語研究については日本歴史言語学会において研究発表した。全体的な概略は書籍として、日本手話の源流と変種の拡大，高見他編『〈不思議〉に満ちたことばの世界（上）』，開拓社に寄稿し、本年３月発売された。

未就学聾者の手話の学術的な実態調査は世界的にも希少で日本国内では初めてである。学会発表においては、初見のせいか反応が薄かったが、歴史言語学会では、新たな視点であるとして多くの興味を引いた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1)木村勉，高橋小百合，神田和幸，スマートフォンを用いた聴覚障がい者向け情報保障システムの構築と評価，情報処理学会デジタルプラクティス，8(1),73-8，査読有，2016

2)神田和幸，木村勉，手話の変遷モデルと源流調査，査読無，ヒューマンインタフェース学会研究会報告集，Vol.18，No.1，pp.41-44，2016

3）木村勉，神田和幸，離島における聾者ホームサインのデータ収集に関する調査報告，査読無，ヒューマンインタフェース学会研究会報告集，Vol.18，No.1，pp.45-48，2016

〔学会発表〕（計４件）

1)神田和幸，手話の源流調査と手話歴史言語研究の方法の提案，日本歴史言語学会 2016 年大会，講演発表，2016

2)神田和幸，「地域社会における聴力しょうがい者に対する手話による就労・生活支援：新潟県の事例」，京都工芸繊維大学ＣＯＩヘルスサイエンスシンポジウム，講演発表，査読無，2016

3)神田和幸，手話の源流を探る，京都工芸繊維大学拡張コミュニティエイド研究センター秋季セミナー，講演発表，査読無，2015

4)木村勉，未就学聾者手話のデータ収集，京都工芸繊維大学拡張コミュニティエイド研究センター秋季セミナー，講演発表，査読無，2015

〔図書〕（計１件）

1)神田和幸，日本手話の源流と変種の拡大，高見他編『〈不思議〉に満ちたことばの世界（上）』，開拓社，pp.113-117，2017

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
神田　和幸（KANDA, Kazuyuki）
京都工芸繊維大学・その他部局等・研究員
研究者番号：70132123

(2)研究分担者
木村　勉（KIMURA, Tsutomu）
豊田工業高等専門学校・情報工学科・教授
研究者番号： 80225044

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者